

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張より」(五)

第九 開園後の世評

大正十一年の五月に、いよいよ池田の子どもの園がひらかれて、「家なき幼稚園」という名が世間に聞こえかけますと、早くもさまざまな悪評非難が、教育者の世界から高まってまいりました。

初めから、教育の機関である「幼稚園」などといわなかったら、かえって自由で愉快であつたらうと思いましたが、さなきだに「遊ばせる」ということに、放漫な誤解を結びつけやすい世の人には、やはり幼稚園と同様の意義を持つものだということが、手短く知らせるために、幼稚園といったのですが、そのための反感からでもありませんか、思いも染めぬことをいいたして教育

者の狭量と偏見を次第に見せつけられるには驚きました。

ある人は「私の幼稚園も古くから野に出ます」と言ってきました。またある園は「私の園でもごぎを使っています。それを運ぶのに保母車をつかっています」と言つて、さも得意らしくいつてこられました。

なぜこのようなことをわざわざ言ってくるのかを最初は不思議に思いましたが、あまりに同じ様なことをいう人の多いのを諸方で見せつけられるにつけて、教育家または専門家という人たちの心事が、かくも小さなことを誇りとするまでに繊細になっていることを気の毒に思いました。

ある教育の大家は「何十年も前に我輩は子どもを車に乗せて走ったことがある。また公園にごぎを敷いて遊ばせたこともある」と、さも自己の専売品を無断で使用しているかのようにふれまわつて、得意がついていたというが、そのたびに、私は園の保母たちに申しました。

野は神のものである。これを子どもたちの園として、なるべくそのままに使用することを最も忠実な教育だと、教えた人が百年二百年の昔からあらわれていました。それを真剣にうけとつて、教えのままに遵奉しようとすることは決して特別な允許を得る必要はありません。殊に、その自然をけがすことばか

かり知っている偏狭な人間から、何らの承認を得なければならぬ理由がありましようか。幼稚園をゴザだと考えたり、板だと考えたり、車だと考えるような事業者は勝手にそれを専業しておればよいことで自然の世界には何らのかかわりもないことでもあります。

私はいつでもこういって若い人たちを励ましてまいりましたが、ある時ついに珍しい疑問に出会いました。

それは、ある有名な女流教育家の質問でした。

「野の中を歩きまわる時に、幼児たちの便所をどうなさいませうか。なるべくズックのような布と鉄棒を用意しておいて、それを車で運んで子ども用に際しては、それを周囲にまいて臨時の便所につくってやる必要があるではありませんか」

私はこの問いに接してまことに用意の細かな婦人教育家のころがけを感謝いたしました。けれどもそのようなズック等のよごれたものを運ぶ不便は到底私どもの耐え得る所ではありませんから私は答えました。

「日本も近ごろは多数の婦人登山家を見るようになりましたが、外国の女性界にはずいぶん古くから登山者がたくさんあると聞きます。その人たちが山中、または野外において行なわれると同様に私の野の幼稚園児は人の見ない所で用を便じさせること

にしております。また、子どもは本能的に、決して人の見るところではしないようであります。それもごく幼少の間はしゅう恥心が薄いように思われますが、五、六歳以後、殊に女の子は絶対に人の目をさげなければ用便をしないように見えます。で、その場合必ず、『ごめんなさい』と言わせることにしていますが、それでなお足りないでしょうか」

私が、こう言いますと教育家は苦笑して帰って行かれましたが、これらはほんとうに親切な忠告でありますけれども、中には、それらの点を誇張して、いかにも不用意な児童の集団だと言いふらすような人々も少なくないように感じられました。

ただし、開園後の八年間を通じてほんとうに誠意ある悪ばを、私たちへ聞かそうとしてくれる人のなかつたことは、むしろさびしいことだと思っております。

初めて教育雑誌上に

大正十三年、すなわち池田へ創設してから三年目に、初めて倉橋惣三氏が、東京女高師から出ている「幼児の教育」四月号に紹介されました。

それは宝塚家なき幼稚園を見て、その恵まれた大自然の美しさを激賞されて後、池田家なき幼稚園を見て、前者のごとき大自然

の特別な援助なしにも、また考慮することのできる点において、むしろ後者に賛するものだ、といったような趣旨でありました。ついで、同じころに東京の教育雑誌「教育の世紀」に志垣寛氏が紹介してくれられたが、更にその文を要約して同氏の著書に引用された。

「親自然の教育」という題目のなかにその親切な紹介は尽きられているのであった。

☆ 家なき幼稚園を訪う

志垣 寛

1

(略) 池田の停留所を降りて少し行くと、すぐそのお宮がある。宮の馬場を二、三人の園児が行く。後を追うて行くと、むこうから園長格のせみ郎氏が双の腕に園児をぶらさがらせて、ニコニコとこっちにやってくる。そこがもう幼稚園である。

鳥居の外に三角形の空地があり、そこにバラック式の小家がある。そこが子ども集合所である。初めこんな集合所というものもなかったそうであるが、雨が降ると一せいに橋詰氏の宅に押しかけ、とてもやりきれなくなったので、お宮の絵馬堂に集めることにしたのである。わずかに十二坪の建物中にはストープが一つある。ストープのまわりには子どもはいず、付添の女たちがい

るだけである。この集合所も名譽顧問であるところの本山大毎社長と、工事をした大工某氏との寄附になったものであるそうだ。こんなでもなければどうも親たちが安心できないらしい。子どもにとってはほとんど用のないものである。

2

さてその集合所には「子どもの国」という額が掲げてあり、次のような本山彦一氏作の家なき幼稚園の歌もかかっている。

天地の間がお室です

山と川とお庭です

皆々愉快に遊びましょう

大きな声で歌いましょう

わたしが室は大きいな

わたしが庭は広いな

町の子どもは気の毒な

かごの中の鳥のよう

室の一隅には保育道具がおいてある。用具といった所で格別のものもない。十数本の竹竿、これはへちまの棚をこしらえるためのものだそう。ウバ車一台、その中には畳表をたてに半折したものが、ぐるぐる巻きにしていっばいはいっている。ここでは回遊といっているが、つまり方々回るとき、この車を押して行つて、川べり、野はら、いたる所で遊ぶ。そのおりにこのゴザを敷いて休むというわけである。しごくいい手軽な設備である。

この十二坪の建物の奥に、四坪ばかりの事務室みたいなものがある。「ここは物置です」橋詰氏はそういって笑う。一脚のテー

ブルと二、三の椅子があり卓上には数冊の大学ノートと一冊の当用日記が無造作に放り出されてある。そばには木れんがが山と積まれ、折たたみ式の小児用椅子が七、八十もつみ重ねてある。「これがこの全財産です。帳簿というのほただこれだけ、この椅子は入園の時東修代りにもつてくるものです。木れんがは普通れんがと等大のもの、二倍のもの、三倍のものと同様に作りました。等大のもので材料費が一個十銭です」と説明がつく。

卓上のノートを見る。出席簿、互談帳、明日の心つもり、保育当番日誌の四種である。互談帳には表紙に、どなたでもご覧下さい。どなたでもおかき下さいとある。話題に上ったこと、感想、所見が地獄づけに記入されている。園児の親たちや、来観者の筆のようなものだ。ある頁には遊戯「表情。自由遊び―ボール。回遊―大広寺、云々と言うふう」に記入され、更に他の一欄には実際上の反省が記入されてある。

3

ふと静かになった。気がついて見るとそこらに自由に喜戯していた園児が一人も見えない。外に出て見る。児たちは皆神前に列を作っている。そこへかけつける。おじぎをして唱歌が始まる。

(前出)

その歌を歌い終わると、祠を一周して、またもとの広場に出て、そこで円になって表情遊戯を始める。よちよちとやと歩くらいの小さな子もある。それでも何かしらやっている。お母さんらしい人が二人列に加わっている。その中の一人は保育当番というのだそう。保育当番制はこの特色で、わが児童の村小学校でいう、父兄も教師だという趣旨を事実を実現したものである。

4

その遊戯がすむと、解放されて勝手に遊ぶ。ぼくたちの手はポケットから出ない寒さなのに、園児は何の苦もなく砂いじりを始める。

「やあだるまの展覧会」と呼ぶ声が聞こえる。砂箱には大小いくつかのだるまができている。綱とびが始まる。風船玉がとぶ。集会所にはいつて塗板に絵をかく子もある。

次の時限は木れんがつみ、男児も女児も一心不乱に木れんがを運ぶ。欲ばって三つも四つも一時にかついでいくものもある。女の子はかかえ、男の子はかつぐ。そして女と男とは別々に陣どって二団に分かれて作業が始まる。男の子の創作は東京のバラックの学校だ。門ができる。茶目がこの門をくぐる。園長のせみ郎先生が、まねしてくぐるうとすると、門がグラグラとくずれぬ。

「地震だ、地震だ」と子どもが騒ぐ。バラック学校にもへいがとり囲まれ、ピアノができる。

女兒の方はお座敷だ。男の子の上へ上へと立体的に積まれるに、女の方では横へ横へと並べられていく。お台所ができる。靴をぬいで、すわりたい気持ちである。この性の現われを、教育上どうすればよいか。婦人問題に一まつの暗影を投げる。

男は男全体で一つの大きな創作に従事している。ただしその大創作を完成すべく個々の園児たちは、自分自分の創作にいそむ。

あるものはピアノを、またあるものはへいを、床をとというふう

に、そしてそこに集成して一大創作が完成さるる。社会の相さな

がらだ。そこにリーダーがあるようにも思える。誰いうとなく学校と口ずさまれて共同の目的が意識されているのがおもしろい。

5

園児六十名に保母四名というのが、気に入った。園児はもうそれ以上ふやしてはだめだ。希望者がふえれば、第二、第三の家なき幼稚園を作ることだ。保母の年齢が若く、しかもみんな女学校出身であるのがうれしい。師範教育、の特殊保育、教育等を受けていないのがうれしい。今の教育は教育の本質から遠ざかって産業や、政治のようなものになっている。今の教育学は教育を指導

するものでなく、学者や、理論家の分解総合欲を満足さすだけのものだ。それらの悪影響を受けないで、ただ純真な、子どもをかわいがる心もただけを資本として出発しているのが気に入った。これは経費の都合からそうなったのかもしれないが、かえっていいことだ。

橋詰氏も言っていた。町の幼稚園など見に行くとかえって悪い方面ばかり感心しているので困ると。今の教育界は研究とされてるので、初心の人々にはそれが珍しくそれが大切のことに思われるからだ。古い幼稚園など見せぬことだ。幼稚園を託児所とせよ。子どもの遊び場とせよ。知識技能の授与所という子どもにとつては牢獄に近い保育思想から解放されなければ……。

自由遊戯の研究をやつてほしい。町や里で子どもたちが勝手に遊戯しているあの遊戯の種類方法を蒐集して、それを少し整理し、子どもにさまざまな遊びの数々を知らせておきたい。

集合所に鳩を飼いたいとの話であったが、これは是非実行してほしいと思う。できるならばうさぎやモルモットのようなものも。

木の葉や木の実を拾って、町の幼稚園に送りたいとの話であった。いい子どもも交歓だ。そして、町の子どもたちを救うゆえんだ。

木の葉木の実の採集、とんぼ、いなご、ばった、たにし、めだか、どじょう、これらの動物に親しむ機会も、もちろん作られていることと思う。ぼくは自分の幼年時代を顧みるとき、小鳥とり、茸狩りのみが、最も鮮活に躍ってくる。動物を捕えることは必ずしも動物の虐待ではない。むしろ愛撫の思想こそはぐくむものだ。

組織も方法も非常にすすんだものと思う。全く幼稚園の革命だ。これまで数多くの自由教育ともいうべきものを見たが、まだこれほどのものに行きあわなかった。ここで初めてわれわれは、われわれの新しい仕事、児童の村の味方、同行者を得たことを力強く思う。

橋詰氏には更にもしろ二つの創案がある。一つは自動車幼稚園というので、大阪市内の幼児を大型の自動車にのせて毎日郊外につれだして遊ばせる組織、今一つは姉妹学校といって、弟妹をもつ姉妹たちに、子ども賛仰の思想を鼓舞するものだ。

パーカースト女史の来訪

同じ年に、米国の教育家で、ダルトン・ブランの創始者として雷名をとどろかしておられた、パーカースト女史の珍しい来訪を得た。

女史の日本へこられたのは東京成城学園の沢柳博士や小原国芳氏等の発起でダルトン案を日本に解説するための会でしたが、その会に関係を持っていた私のために、特に園の趣旨がうれしいといつて来てくれたのでした。小さな小さな呉服の森の片かけにある、このささやかな子どもの園が、世界の大教育家に訪問されたうれしさは、ほんとに夢のようでした。

ちょうどその時に、園の手伝いをしていました娘の芹子が、その日の、夜遅くまでふかして書き止めてくれた文があります。実にまずいのですが、何かの記念にと採録しておきました。

☆ パーカースト女史来園記（四月二十一日）

今日は、いつも勢いよく、呉服神社の表から出るお日さまの姿が見えませんが、どんよりした花曇りの空から今にも雨が降り出しそう、なまぬるい風に、もう桜の花がホロホロと散ります。

でも今日は世界的の教育家パーカースト女史が来園して下さるということを知ることが、光栄だという感じよりも、ただうれしくて、池田の幼稚園の主義を主張しておられるというせい、幼稚園の母をまつような気持ちで、いそいそと、園に参りました。いつもの通り、早起きの幼児が、こんな変なお天気なのに、相変わらず元気に朝のあいさつをしてくれたので、よけい勢いづけられ

て……。

今日は、女史が幼児と一緒に昼食をしたためて下さるそうで、野外主義の、無一物の幼稚園は大きすぎです。私の家からテーブルを運んで来て、おとなりのアレキサンダー先生から椅子を借りたり、テーブルかけを拝借したりして、食卓の用意はできました。でも米国のお友だちにアレキサンダー先生が非常に親切にしてお下さったのは、うれしゅうございました。それから園の前に、日章旗と米国旗とを交差いたしました。子どもたちはただよろこんで、

「先生、きょうは誰がいらっしやるの」

「今日はね、アメリカのお客さんがいらっしやるの」

「それじゃ、握手するの」

「え、しっかり握手してグッドモーニングというのですよ」

二本の旗がハタハタと風になびいています。それから食卓の上を飾るために、満寿美の花壇に行つて、きれいな色どりの西洋草花を花瓶に生けてほっと一息つきました。

もうパーカースト女史の来園を待つばかりです、いらっしやる時間が十一時半という予定なので、まだまだ時間があります。それで、最初はお唱歌のけいこ、お遊戯などをしていますと、もう今にも雨は降つてきそうです。でも、子どもは相変わらず元気で

す。十一時になりますと、アレキサンダー先生がパーカースト女史を迎えに行くのだと言つて停留所の方に行かれました、そのうちに鳥居の方に園長様と成城小学校の主事の小原先生のご一緒に姿が見えました。かねて講演もうかがいましたし、ダルトン・プランの主義を実行していられると聞いて、私たちの崇拜してやまなかつた先生です……その小原先生をお迎えしてごあいさつなどする中に、パーカースト女史が通訳の人と来られました。園の子どもは皆われ先きにと走り出して、回らぬあどけない口調で、しかも親しそうに女史とあいさつを交してくれたのは涙の出るほどうれしく感じられました。女史は見上げるほどの立派な体格です、そしてお顔も生々として、いかにも幼稚園の母のような感じのする方です。やがて皆はお宮さんの中で女史にお遊戯をお見せするので、お宮さんに入られた女史は、物めずらしそうに四辺を見回して、大毎の一矢通訳からいろいろと説明を聞いておられます。こちらの園の子どもはまるく輪になって女史のごあいさつを聞くのです。女史はやさしい微笑をうかべながら、

「皆さん、今日、私はこの幼稚園に来て皆さんの快活なお顔の見たれたことをうれしく思います。皆さん丈夫に、そしてえらくおなりなさい」

子どもたちは、うれしそうにニコニコしています。大方、女史

の言われたことがわかったのでしょうか。それから楽隊に合わせてハトポツポと汽車が通る、をいたしました。

十二時になったので、皆椅子を持って集合所の前に集まり、子どもは椅子に腰かけますと、女史はその方に向かってテーブルに着かれました。ここにはじめて、私たちが望んでもかなわない海波何千里の彼方の珍客との楽しい団らんがはじまったのです。女史は純日本式のしんげん弁当です。それをおいしそうに召し上がりながら、こんなことを言われました。

「この幼稚園の子どもは顔色の生々した子どもは、どこにもない」と。そのころからポツポツ雨が降り出してきました。交差した日米の旗の下で桜にまじって落ちてくる細い春雨を受けながら女史があどけない子どもと一緒に食事をしておられる所は絵にも見られない親しきがありました。その中に食事もすみ、女史は私たち四人に向かって「子どもたちをかわいがってやって下さい。そして、私はこのような幼稚園がもっとたくさんできることを、希望してやみません」など申されました。

(中略)

ああなんと気持ちのいい方。そして、幼稚園の母のような感じのする方、いつまでもあの意味ある、しかも記念すべき四月二十一日を忘れることはできませんでしょう。(橋詰芹子記)

その後の女史のメッセージ

かくして非常の印象をどめて下さったパーカースト女史がその後「大阪家なき幼稚園」の創設まぎわに私へ送って下さったメッセージがあります。

親愛なる橋詰さん、私は、あなたの「家なき幼稚園」が大阪市内にも拡張されて、大規模で行なわれるようになることがあって喜びにたえません。池田の幼稚園を訪ねまして以来、私はこの事業についてまじめに考えて見ました。そして今私は全心を注いでこの計画を賛成するというのを申し上げる幸福を有します。

世人は最初のうちこの事業の大いなる意義を了解し得ないかもしれませんが、しかしこれは真の大事業であります。今に世界の他の国々までたしかに広まるべき性質のものでありますから、どうぞ児童のためどこまでもまい進していただきたいと存じます。

今度の計画による市内の諸中心点から児童を集めて郊外に連れ出して遊ばせるという仕事は、たしかに大きな使命の表現として人心に訴えることと信じます。

一九二四年五月八日最親愛なる ヘレン・パーカースト